

島根県立看護短期大学・看護学科における 1997年度の地域看護実習と今後の課題

栗谷とし子・吾郷美奈恵・中谷 久恵

Present Condition and Further Problems of Community Nursing Practicum at '97 in Simane Nursing College

Tosiko KURITANI, Minae AGO
and Hisae NAKATANI

概 要

平成9年度より改正された新カリキュラムに対応した地域看護実習を終了した本学第1期生について、現状と今後のよりよい実習のあり方を検討した。検討した内容は、学生の実習目標に対する自己評価、感想・考察、実習内容や教員評価などの関係である。

その結果、地域看護実習の実習場所2カ所の教員評価は有意 ($P<0.01$) な正の相関関係を示した。また、実習場所による自己評価には差があり、限られた実習期間や3年過程の看護教育における限界も感じられた。しかし、学生が自由記載で記述した内容をKJ法で分類してみると、多くの学び、気づきを示していた。多くの課題を残した実習ではあったが、担当した教員として確かな学びの手応えを感じている。

キーワード：地域看護実習、在宅看護、自己評価、教員評価

I. はじめに

社会の高齢化の進展、医療の高度化・専門化、少子化を背景に、看護サービスの拡充とその質の向上を図ることを目的として看護職員の養成に関する教育カリキュラムが平成9年度より改正された（以下、新カリキュラムと略す）。その中で注目すべきことは、高齢社会を迎え在宅療養者に対する看護ニーズの増大に対応して、新たに“在宅看護論”が加えられたことであろう。このことは、これまでの施設中心の看護から地

域で生活しながら療養する人々とその家族を理解し、在宅看護の知識・技術を身につけ、施設内外を問わず力が発揮できる看護婦の養成を意図したものである。そして、従来の臨床実習は“臨地実習”に改められ、病院のみならず看護が行われているあらゆる場での実習が必要とされた。そのため、市町村保健センター、診療所、助産所、老人保健施設、訪問看護ステーション、在宅介護支援センター等の多様な施設を活用して学生が直接、患者と家族に接する実習が推進されている¹⁾。

この新カリキュラムが導入される平成9年4月に先駆け、本学では平成7年4月の開学当初から地域看護学、地域看護実習をカリキュラムに位置づけ、保健・医療・福祉を総合的にとらえた看護ができる看護職者の育成を旨としてきた。新カリキュラムより2年早く、本学の一期生が3年次生となった平成9年度に、訪問看護ステーションと市役所で初めての地域看護実習を行った。第一期生全員の実習を終え、実習の到達目標に対する学生の自己評価等は高く、担当した教員は手応えを感じた。しかし、新しい形態、分野での実習を作り上げていく難しさも経験し、多くの課題も残している。

本稿では、本学地域看護実習の実習目標に対する学生の自己評価と感想・考察をもとに、地域看護実習の有効性と限界について考察し、今後のよりよい実習のあり方を検討した。

II. 実習方法

1. 実習目的と目標

本学における地域看護実習は、2年次前期の地域看護学概論（1単位15時間）と後期の在宅看護論（1単位30時間）の統合学習として位置付けている。地域看護実習全体の実習目的は「個人・家族・地域集団を対象にした生活の場で、健康上の問題を予防、解決していくために行われる看護援助の実際と地域で働く看護職の役割を学び、地域看護に必要な基礎的能力と看護者としての態度を養う。」である。さらに、実習施設・機関（以下、実習場所と略す）別に目的を焦点化して示した。訪問看護ステーションの目的は、「在宅療養者やその家族の健康上の問題点を理解し、在宅看護を実施できる基礎的能力を養う」とした。市役所では、「地域住民の健康と生活環境との関連を理解し、公衆衛生看護の実際と役割について学ぶ」とした。また、それぞれ実習場所別の実習目標を示し、表1の各4項目である。

2. 実習場所

3年次の実習(1.5単位67.5時間)は、島根県看

表1 地域看護実習における実習目的と目標

実習場所	実習目的	実習目標
訪問看護ステーション	在宅療養者やその家族の健康上の問題点を理解し、在宅看護を実施できる基礎的能力を養う。	1) 訪問看護における看護婦の役割、機能が理解できる。 2) 在宅療養における継続看護の必要性が理解できる。 3) 在宅ケアシステムにおける保健・医療・福祉の連携について理解できる。 4) 訪問看護における訪問の技術・態度が理解できる。
市役所	地域住民の健康と生活環境との関連を理解し、公衆衛生看護の実際と役割について学ぶ。	1) 地域住民の健康問題の把握や、健康管理のあり方について理解する。 2) 予防からリハビリテーションまでの健康レベルに沿った保健・福祉サービスの概要が理解できる。 3) 地域住民のニーズに沿った保健活動のあり方や実際が理解できる。 4) 行政機関と他の関連機関との連携・協力における地域看護のあり方が理解できる。

護協会訪問看護ステーション“やすらぎ”（以下、ステーションと略す）と市役所の市民福祉部の2カ所で行った。市役所は本学がある出雲市で、訪問看護ステーションは本学から37キロメートル離れた遠距離にある。

3. 実習内容

実習期間は4月から12月までの9か月間で、7クールである。実習は“老人看護・地域看護実習”として3単位14日間行っているため、1クールのメンバーは2グループに分かれ期間半ばで老人看護と地域看護を交代する。そのため地域看護実習としては1.5単位の7日間で14クール実施した。実習場所の分散と拡大があるため図1に示したように、7日間のうち6日間で市役所とステーションに別れて3日間ずつの実習を行い、最終日は全員がそろっての学内カンファレンスに充てた。

ステーションでは、学生1人に対しステーションのスタッフ（看護婦または保健婦）1人が同伴し、学生実習の受け入れに同意を得られた家庭について、平常業務の訪問看護に参加した。

グループ	期間(日)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
A (3人)	老人看護実習 (○園)								ス	ス	ス	市	市	市	学
B (3人)	老人看護実習 (M苑)								ス	市	市	市	ス	ス	内
C (3人)	ス	ス	ス	市	市	学									
D (3人)	市	市	市	市	ス	ス									

ス：訪問看護ステーション 市：市役所

図1 老人・地域看護実習における1クールの流れ

また、訪問は3日間で5～6家庭を目安に行った。訪問家庭については学生の希望する状態や状況のケースを事前に聞いた上で配慮したが、訪問先の学生受け入れに対する負担軽減のため、同じ家庭を継続訪問することはできなかった。ステーションの最後となる3日目の午後はステーションの指導者と本学教員を交えてカンファレンスを行った。

市役所では、健康福祉部健康増進課を窓口として計画されている保健・福祉事業計画の中から学生が参加可能な事業で学んだ。各事業を担当する保健婦のもとで実習することもあれば、学生のみが参加する事業もあった。参加する事業は事前に学生の興味・関心に応じて参加できる実習を想定し、実際の行動計画としてスケジュールを主体的に立案させるよう配慮した。

本学の担当教員は2名で、ステーションと市役所に分かれ、最終日のカンファレンスは教員2名も参加した。また、2カ所の実習評価はそれぞれ担当した教員が実習先の指導者の評価をもとに100点満点で行った。

Ⅲ. 研究対象と方法

対象は、本学看護学科第1期生全員の83名である。

方法は、学生が実習終了後に提出した自己評価表を用い、学生の実習目標毎の達成度と感想を元に検討した。自己評価表の内容は、表1に示したステーションと市役所の実習目標毎に、「よく理解できた」から「理解できなかった」までの5段階評価である。また、地域看護実習を終えての自由記載法とした感想・考察欄は、KJ法に準じてデータを整理し、代表的なものに分類・整理した。

さらに、ステーション実習での家庭訪問回数、市役所実習での事業参加回数と自己評価の関連、教員評価と学生自己評価の関係などを分析した。データ解析は、SPSS 統計パッケージを用いた。

Ⅳ. 結 果

1. 訪問看護ステーション実習

ステーション実習において教員が100点満点で行った評価は60～82点で、平均76.0±4.8点であった。教員評価と学生が記入した実習目標4項目の自己評価に有意な関係は認められなかった。また、3日間の実習で学生が行った家庭訪問回数は2～6回で、平均4.7±0.7件であり、訪問回数が多い者ほど教員評価が有意に高い相関関係 ($r=0.354, P<0.01$) を認めた。

実習目標別に学生が自己評価した結果を図2に示した。自己評価が“5”と“4”の「理解できた」と記入していた学生は、目標1の「訪問看護における看護婦の役割や機能が理解できる」が97.6%，目標2の「在宅療養における継続看護の必要性が理解できる」が72.3%，目標3の「在宅ケアシステムにおける保健・医療・福祉の連携について理解できる」は69.9%，目標4の「家庭訪問における訪問の技術・態度が理解できる」は86.8%であった。反対に自己評価が“1”と“2”の「理解できなかった」と記入していた学生は、目標1が1.2%，目標2が4.8%，目標3は2.4%，目標4はいなかった。目標1については殆どが理解できたとしており実習目標の達成度が非常に高かった。目標4についても8割以上が理解できたとしており達成度が高い。また目標2，3については7割前後と、やや下がるが全体的に訪問看護ステーショ

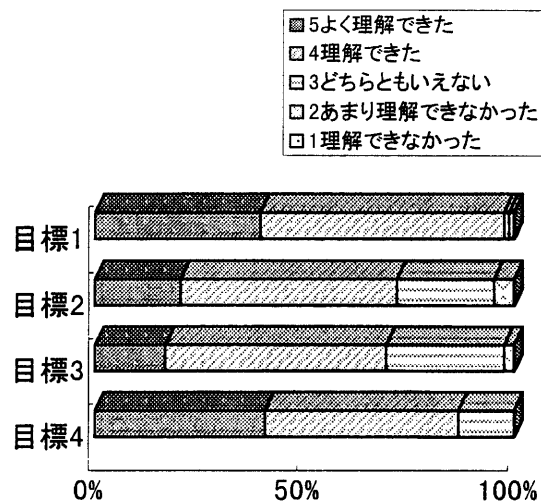


図2 ステーションの実習目標別、自己評価の割合

ンでの目標達成度は高かった。

実習目標毎の自己評価の点の関係を相関係数で見ると、実習目標1と3は0.342 ($P<0.01$)、1と4は0.348 ($P<0.01$)で、自己評価の1が高得点の学生は目標3および4の自己評価も高かった。また、3日間の実習の家庭訪問回数と4項目の自己評価に有意な関係は認められなかった。

2. 市役所実習

市役所実習における教員の100点満点で行った評価は53~92点で、平均79.2±6.8点であった。教員評価と学生が記入した実習目標4項目の自己評価に有意な関係は認められなかった。また、3日間の実習で学生が参加した事業の回数は2~7事業で、平均4.4±1.0事業であったが、教員評価と事業参加回数に有意な関係は認められなかった。

次に、実習目標別に5段階で学生が自己評価した結果を図3に示した。自己評価が“5”と“4”の「理解できた」と自己評価したものは、目標1の「地域住民の健康問題の把握や、健康管理のあり方について理解する」が49.4%、目標2の「予防からリハビリテーションまでの健康レベルに沿った保健・福祉サービスの概要が理解できる」が45.8%、目標3の「地域住民の

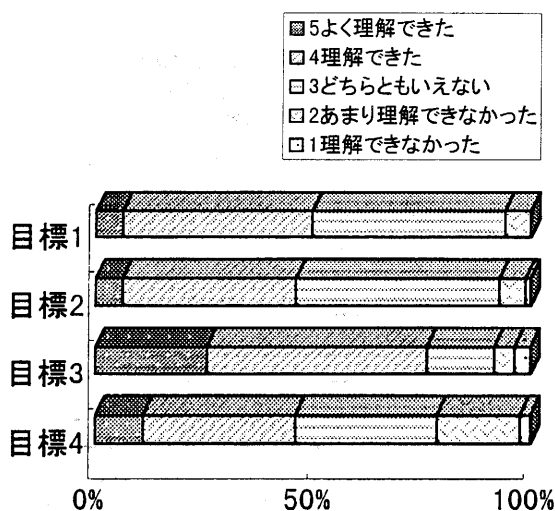


図3 市役所の実習目標別、自己評価の割合

ニーズに沿った保健活動のあり方や実際が理解できる」は75.9%、目標4の「行政機関と他の関連機関との連携・協力における地域看護のあり方が理解できる」は45.7%であった。反対に自己評価が“1”と“2”の「理解できなかった」と評価したものは、目標1が6.0%、目標2は7.2%、目標3は8.4%、目標4は21.7%であった。

学生が参加した事業内容は乳幼児健康相談、乳幼児健康診査、成人・老人健康相談、機能訓練、育児サークルなどである。一つ一つの事業に参加の有無別に自己評価をみたが、各事業と自己評価には一連の関係は見いだせなかった。

また、事業の参加回数が多いほど教員評価が悪くなるような傾向が伺えたが、自己評価との関係は認めなかった。

また、教員のステーションと市役所の評価は有意な正の相関関係 ($r=0.308$ $P<0.01$) を認めた。

3. 地域看護実習の感想・考察

実習終了後に学生が自由に記述した“感想・考察”から抽出した主な内容は329件あった。その内容を5つに分類し、表2に実習全体についての感想、表3に地域看護の視点、表4に意識・意欲の変化・感動・喜び、表5に看護に対する見方・考え方、表6に看護職者としての役割・姿勢・態度を示した。

記述された内容が最も多かったのは、表3に示した地域看護の視点が165件で、そのうち特に対象については56名、家族ケア、連携、継続看護、信頼関係については10名以上あった。2番目に多かったのは、表2に示した実習全体についての感想で68件であった。また、3日間ずつという短期間でしかも2カ所の実習に対して、20名が充実したと感じたのに対し、そうでなかったと不足を感じたのは12名だった。楽しかった、もっと長く実習したかったという項目内容も加えると、35名が実習を肯定的にとらえていた。また、6名が実習形態の違いに戸惑ったり、実習するまでイメージがわからないと感じていた。3番目に多かったのは表4に示した意識・意欲

表2 「実習全体についての感想」の内容別, 人数

内容	人数
・3日間ずつであったが、様々なことが学べ充実した・意義のある・貴重な実習だった	20
・楽しかった・新鮮だった	11
・もっと長く実習したかった	4
・3日間ずつで、慌たしい・慣れる前に終わった・理解するには短い・何をしてよいかわからずただ見学だけ	12
・今までと実習形態が違って戸惑う	1
・実習するまでイメージがわからなかった	5
・訪問看護婦・保健婦の仕事にも目がいった(進路選択の参考)	7
・多くの人と出会うことができた実習	7
・病院以外のいろんな場所で実習でき恵まれている	1
合計	68

表4 「意識・意欲の変化, 感動・喜び」の内容別, 人数

内容	人数
・在宅・地域看護に興味があった・やりがいがあると感じた	5
・将来、在宅看護に関わりたい	6
・視野が広がった	3
・スタッフの考えや思いにふれ勉強になった・元気をもらった	5
・スタッフが主体的・誇りを持って仕事をしていて・明るく生き生きしていた	5
・知識・技術・態度を持ったナースになりたい	1
・地域のひととのふれあい・温かさを感じた	2
・家に入って行くことの難しさ・在宅で看護する難しさ	4
・人と深く関わるので大変	1
・地域で学んだことを病院でも役立てられる・生かしていきたい	10
合計	42

表3 「地域看護の視点」の内容別, 人数

内容	人数
対象	
・小児～老人まで幅広い	4
・生活をしている(病院では病気の治療に重点を置き生活と結びつかない)	8(2)
・健康な人～リハビリまであらゆる健康段階	10
・個々にニーズを持っている・市民のニーズの多様性	5
・その人が一生をどのように過ごしたいのか	1
・患者である前に人間である・一人の人としてみる	3
・個人があって周りに家族・家庭環境などの背景をみていく大切さ・難しさ	9
・病院の患者もいずれは地域へ帰る人、地域の中で家族とともに生活をしていく姿を思い描くことができた	10
・介護者の大変さ・苦勞	1
・地域の人すべてに呼びかける難しさ	1
・家庭の良さ・温かみを感じられた	4
家族ケア	
・家族も含めてケア・家族にあった看護・対象者と介護者	19
場	
・生活の場面	6
・プライベートな場に踏み込んで相手を知る	1
・広い	2
・自分の人間性や信用が試される厳しい場	3
QOL	
・地域住民が健康で生活しやすい環境を作る上での地域看護/QOL向上のための支援	8
社会資源・連携	
・行政で用意されるサービスの多様性・ニーズに合わせた活動	6
・病院・地域(保健・医療・福祉)が別個でなく、それぞれの役割を持ちながら補足しあい連携している。またその必要性と課題	14
・保健・医療・福祉の連携の中心的存在の地域看護職	3
・一人にいろいろな職種が接するので統一した方針を立てることが必要	1
継続看護	
・退院はゴールでなく、折り返し地点。退院後の生活も考える。入院時から退院のことを考えていく必要	6
・継続看護の必要性・条件	5
・病院・地域の連携により在宅ケアが円滑に進められ、継続看護が可能	6
信頼関係	
・信頼関係を築く重要性・大切さ	12
合計	165

表5 「看護に対する見方・考え方」の内容別, 人数

内容	人数
・自己洞察	3
・看護の理念は病院も地域も同じ	4
・看護といえば病院、病院の中の患者にしか目を向けていなかったことに気づいた	9
・病院で当然と思っていたことが通用しない	2
・看護職の場の広さ	1
・看護はサービス、商品である	3
・看護自体が社会の形態やニーズに応じて変わる。地域看護はますますニーズが高まる分野でいろいろ勉強していく必要性	10
合計	32

表6 「看護職者としての役割・姿勢・態度」の内容別, 人数

内容	人数
・判断力・責任感	3
・知識・技術・技量	6
・自分の考え(価値観)の押しつけになってはいけないこと	3
・温かい人間性	1
・社会資源サービスの知識と使う能力(判断)が必要	6
・丁寧に親切な接し方・本人家族の意思を十分に尊重する	3
合計	22

の変化・感動・喜びであった。11名が在宅看護・地域看護に興味をわき、10名が実習での学びを病院での看護に返して役立てたいと感じていた。4番目は、表5に示した看護に対する見方・考え方で32名であった。看護の動向についての視点や、看護を病院内に限定していたと振り返ったのがそれぞれ10名程度あった。5番目は、看護職者としての役割・姿勢・態度だった。6名がそれぞれ知識・技術・技量や、社会資源サービスの知識と使う能力の必要性をあげていた。

V. 考 察

今回検討した学生の自己評価は、学生自身の実習に対する満足度とも考えられる。ステーションでの自己評価は7割～9割が理解できたとしており、学生の満足度の高さが伺えた。反面、市役所の自己評価は、4割～7割にとどまっており、理解しにくいまたは満足度の低い側面もあったと思われる。

ステーションでの実習は、在宅療養者家庭(以下、利用者と略す。)に訪問看護婦が学生を同行訪問する形をとっている。訪問看護は利用者との契約で看護サービスを買ってもらうことにより成り立っているのだから、学生実習のためだからといって学生の未熟なケアを実践することは許されず、学生は利用者に対して直接的なケアを行うことは少ない。そして、訪問看護婦は学生から一挙手一投足をみられる緊張感を持ち、しかも学生を同伴する事が利用者の不利益にならないよう配慮しながら、利用者のケアに集中している。このような状況の中、学生は在宅で療養している人を実際に訪問するという体験と、訪問看護婦というロールモデルとの出会いによって学んでいると考える。病院実習では触れることのできない、しかも机上の学習ではイメージし難い“生活”や“家族”に直接接する事で、家の敷居をあげることの重み、疾病や障害を持って家で生活している人や家族の様々な思い、考え、苦勞、生活状況のありのままを目の当たりにする。その中で対象の捉え方に広がり生まれ、自分の価値観が通用しないこと、主体は利

用者であること、家族を同時に見ていくこと等を学ぶことになる。また、訪問看護婦と利用者のやりとりの中から、利用者との信頼関係や医師が近くにいない場での看護婦の判断の重要性、責任、やりがい、訪問看護婦としての視点、役割、疾患面だけでなく生活全般を視野に入れていく必要性、そのための他職種・社会資源サービスとの連携の必要性を学んでいる。

ステーションの実習目標毎の関係を見ると、実習目標1の自己評価が高得点の学生は、目標3と4の自己評価も有意に高かった。このことは、目標3の「保健・医療・福祉の連携」や目標4の「訪問の技術・態度」が、目標1の「訪問看護における看護婦の役割、機能」として欠かせない大切な要素であると捉え、学べたからだと考える。また、このことは表3に示した地域看護の視点、表6に示した看護職者としての役割・姿勢・態度にも現れている。

訪問回数と自己評価に有意な関係は認められなかった。このことは、学生はたとえ1回の訪問であったとしても、上記のような体験をする事で、生活の場における看護の役割や態度を学べたと実感するものがあり、満足感を得られたからではないかと考える。これらのことから、ステーション実習が新カリキュラムでの目的に沿った実習として大変有効であることが示唆された。

今回遠距離でのステーション実習となった背景には、訪問看護ステーションは独立採算性であり、経営面や人材の確保の面で多くの困難を抱えている現状の中、受け入れ体制が整った実習場所として適切な施設がないことがあげられる。しかも、今後他の学校からの在宅看護実習がスタートすることを考えると、ステーションでの実習を確保することは難しくなる可能性がある。ステーション側の負担を最小限に抑え、学生が学び、実習がステーションの発展に寄与するような実習のあり方を、お互いに協力して創り上げていく必要性を感じている。

市役所実習では3日間という限られた実習日では実習内容を選択することもできず、実習内

容が偏ったり、どうしても事業が少ない時期があった。そのため希望する事業が実習日にはなく、参加できる事業で学んでおり、学生の興味・関心を引き出すことが難しかった。また、学生専用のスペースがなく、実習中誰に相談してよいかわからないなど学生が安心できる環境が得られにくかった。このようなことから、示した実習目標を学びにくい結果となったことが考えられる。柳沢²⁾は保健所実習における看護学生の実習の現状と問題点を次のように述べている。「実習指導内容が不明確である。“特にこれだけは伝えたい”ことが、明確に職場内で共有化されておらず、単なる事業の説明に終わることが多い。学生の実習へのイメージと保健婦の思いとに、大きなギャップがある。実習に対する目的・目標が学校側と共有されていない。学校側が“何を、どのように体験させるのか”明確にしていく必要がある。実習システムが整備できていない。」このことは、今回の市役所実習にもあてはまることである。今後限られた期間の中で何をどのように学ばせるのか、目標の具体化を図ることや学生の実習のイメージを高める方法、教員の指導体制も含め、人的・物理的環境を整えることなどを検討する必要がある。

ステーションにおける家庭訪問の回数と教員評価には有意 ($P<0.01$) な正の相関関係を認めた。これはケースや、訪問に同伴した看護婦と体験を重ねることで、対象理解への深まりが出てくるためと考える。しかし、家庭訪問の回数も事業の参加回数も多ければ多いほど良いとは考えられない。学生が不消化とならない、しかも受け入れ側の負担にならない適度な回数が望ましく、あわただしいだけの実習にならないように計画する必要がある。

新カリキュラムに2年先立ち、地域看護学を柱だてして実習を行ったが、各実習場所とも3日と限られた日数では新しい実習環境に慣れることで精一杯とも予想していた。しかし、表2, 3, 4, 5, 6に示した学生の感想・考察からは、3日間だったが充実していたと肯定的に感じた者は35名と、そうでなかった者の3倍

あった。また、地域看護の視点や、意識・意欲の変化や感動・喜び、看護に対する見方・考え方、看護職者としての役割・姿勢・態度など多くの学びを表していた。明石³⁾らは臨地実習固有の学習として①人間関係を成立させる学び、②看護実践の価値認識の学び、③知識・技術・態度の統合の学び、④専門職業人として身につけるべき姿勢・態度の学びの4点を示している。そして開発したい能力として対象理解に関するもの、人間関係形成に関するもの、人間的成長、生活・健康状態の理解等、看護の役割、感動・喜び、看護観の形成、看護の価値、看護の機能の自覚、看護のよろこび、看護過程の展開、知識技術の活用、知識技術の応用、知識技術の修得、技術の展開、実践の評価、問題解決能力、理論と体験をつなぐ、看護実践のプロセス、協調性、看護の役割、看護婦の態度、責任感、自主的姿勢、自主的な学習、社会人としての能力等を挙げている。これらを踏まえると、学生は実習方法上でできなかった看護過程の展開と、知識技術の応用・修得以外はまんべんなく捉えており、各実習場所でも少ない日数でよく学んだと評価している。

今回の結果から、学生の自己評価と教員の評価は一致しなかった。また、実習場所2カ所の教員評価は有意 ($P<0.01$) な相関関係にあった。2カ所の実習内容は全く異なっており、要求される知識・技術にも違いがある。しかし、地域の人々の生活理解と共感を育てる実習にしたいという基本姿勢は、ステーションでも市役所でも共通であり、地域看護の基本的な姿勢の評価において、教員間の到達目標が一致していたことの現れと考えている。

実習場所が2カ所に分かれていても、目的は一つの地域看護実習と計画してきた。しかし、それぞれに目標を示したこともあり、学生にとっては別々の実習として終えてしまったようである。最終日の合同カンファレンスで2カ所の実習を統合させる学びになるよう指導してきたが、7日間の内に祝祭日が入るなどで、実質6日間の実習となるグループも多くあった。半日単位での移動となるため、気軽に2カ所の実習場所

から学生を集めての合同カンファレンスは行うことができない。実習場所の分散・拡大によるデメリットとして今後の方策が必要と考えている。

初めての实習を終え、いろいろな課題も明らかになったが、担当した教員としては学生個々の確かな学びの手応えを感じた。今後、2カ所で行う実習が1つの地域看護実習として展開でき、実習場所との共通理解のもと、より多く学び、学生の自己評価としての満足度も高くなるよう、実習方法を改善している現状である。

文 献

- 1) 看護職員の養成に関するカリキュラム等改善検討会：看護職員の養成に関するカリキュラム等改善検討会中間報告書，看護展望，21(6)，18-48，1996.
- 2) 柳沢尚代：こんな保健婦実習にしたい看護学生の実習に対する現場保健婦の意見，看護教育，39(5)，360-364，1998.
- 3) 明石恵子他：臨地実習教育における学習効果と課題，看護教育，38(2)，112-117，1997.
- 4) 川喜田二郎：発想法，中央公論社，1995.